



財米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書

32

鳥取県米子市

SUWA-NISHIYAMANOUSHIRO

諏訪西山ノ後遺跡
(諏訪5号墳)

1999.3

財団法人 米子市教育文化事業団



例　　言

1. 本書は、鳥取県米子市諏訪西山ノ後地内において実施した、無線基地建設工事に伴う諏訪西山ノ後遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(株)中国セラーの委託を受けて(財)米子市教育文化事業団が実施した。
3. 調査は、(財)米子市教育文化事業団調査員 佐伯純也が担当した。
4. 本書に用いた標高は標準海拔高度である。
5. 第1図は、米子・境港都市計画図27(米子市)を複写、縮小し、加筆したものである。
6. 遺物の番号は、本文、図、写真とも対応している。
7. 本書は、佐伯が執筆、編集した。
8. 出土遺物、実測図、写真是米子市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

1. 位置と環境	1
2. 既往の調査	2
3. 調査の概要	2
4. 検出遺構	3
5. 出土遺物	3
6. まとめ	3
7. 諏訪西山ノ後遺跡における花粉分析	6

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	1
第2図 調査位置図	2
第3図 出土遺物実測図	3
第4図 遺構図	4～5

<10>0100573302

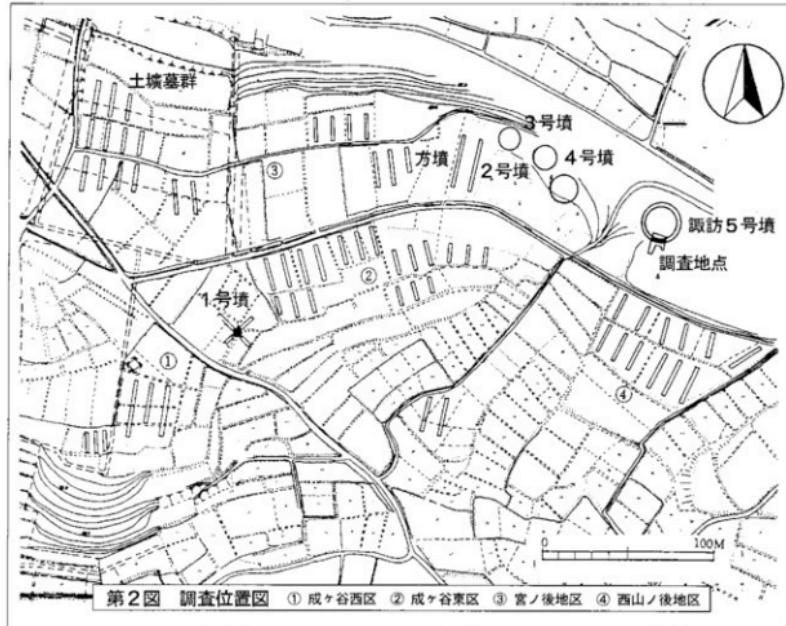
1. 位置と環境

諏訪西山ノ後遺跡は、米子市諏訪に所在する集落遺跡である。遺跡は日野川と法勝寺・小松谷川に挟まれた段丘、長者原台地の東端に位置し、北西に福市（4）、青木（3）遺跡、南に長者屋敷遺跡（15）が所在する。長者原台地は、大山ローム層と黒ボク層の堆積した洪積台地である。周辺の遺跡では、有舌尖頭器が奈喜良遺跡（6）、諸木遺跡（16）で確認されており、縄文時代草創期から人々の生活をたどることができる。弥生時代前期には会見町諸木遺跡のような、環濠を持つ集落が現れ、また弥生時代中期中葉以降からは台地上での遺跡の形成が顕著となり、福市、青木遺跡のような大規模な集落が営まれた。古墳時代前期には日原6号墳（5）が作られるが、複数の埋葬部を持つ削り出しの長方形墳であり、家族墓的な性格を脱していない。中期には全長100mの前方後円墳、三崎殿山古墳（20）が作られ、後期には横穴式石室墳が別所古墳群（9）、石州府古墳群（11）、横穴墓群が福市遺跡などで確認されている。奈良時代になると、丘陵基部に大寺庵寺（13）が作られ、仏教文化の萌芽が見られる。一方でまた会見郡衛跡と推定されている長者屋敷遺跡も所在し、この付近が会見郡の中心的位置を占めていたことがわかる。近世末期には佐野川用水の開削により、台地上での農耕が容易となり収穫量が増加した。昭和54年から五千石地区のは場整備が実施されたほか、青木団地の造成などで周辺の環境は一変している。



【遺跡名】

1. 諏訪西山ノ後
2. 桶ノ口第1遺跡
3. 青木遺跡
4. 福市遺跡
5. 日原古墳群
6. 奈喜良遺跡
7. 下安曇遺跡
8. 上安曇遺跡
9. 別所遺跡群
10. 別所古墳群
11. 石州府古墳群
12. 越敷ヶ丘遺跡
13. 大寺庵寺
14. 坂長庵寺
15. 長者屋敷遺跡
16. 諸木遺跡
17. 宮尾遺跡
18. 天萬土居前遺跡
19. 寺内遺跡
20. 三崎殿山古墳
21. 越敷山遺跡群
22. 境古墳群



2. 既往の調査

昭和54年度からのは場整備に先立ち、米子市教育委員会により、諏訪遺跡群が調査されている。この諏訪遺跡群の名称は、は場整備に伴い便宜的に付けられたものであり、単一の遺跡を指すものではない。長者原工区では、「成ヶ谷西区」「成ヶ谷東区」「宮ノ後」「西山ノ後」の遺跡について調査され、西区では中世の環濠状造構、中世墓の諏訪1号墳が検出されている。また宮ノ後地区では古墳時代の土塚墓群、方墳が検出されている。今回の調査地、西山ノ後地区では、古墳時代前期の堅穴住居跡が検出されているほか、奈良時代の建物跡、胞衣埋納遺構が検出されている。このような状況から、大地の縁辺部、宮ノ後、西山ノ後地区に住居、墓域の空間が設定された古墳時代前期の小集落の存在が認められる。

3. 調査の概要

調査地の現況は、赤松を中心とした山林であり、土地所有者の話によると戦前には桑畠として利用されたという。調査地の北側は笹竹が密生しており、歩くことも困難な状況であったが、高さ50センチほどの高まりが認められ、直径10メートルほどの円墳と推定された。米子市埋蔵文化財地図では、現地に諏訪2～5号墳まで、4基の古墳が記載されており、地図と照合した結果から、この高まりを諏訪5号墳と判断した。表土の暗褐色砂質土層を除去すると、暗黄色粘質土が現れ、この面より遺構を検出した。調査終了後には測量、写真撮影を実施したほか、周溝埋没土の花粉分析を依頼し、古環境の復元も試みた。

4. 検出遺構

全ての遺構は、暗褐色砂質土層を除去した地山面（暗黄色粘質土層）で検出した。また地山面の一部には、歓状に削られた痕跡が残るが、戦後の桑畑の耕作による攪乱である。

S D 01 長さ8mにわたって検出した。諏訪5号墳の周溝である。幅4m、深さ約70cmで断面は緩やかなU字形を呈する。溝内は上層に黒色土、下層に淡黄茶色土が堆積しており、遺物は全て黒色土から出土した。検出した周溝を円墳と仮定して復元すると、周溝を含めた直径は約28mになる。

S D 02 検出長1m、幅38cm、深さ24cmの溝である。溝内から遺物は出土せず、時期、性格などは不明である。

S K 01 平面は楕円形を呈する土坑である。長辺90cm、短辺55cm、深さは20cmで内部に2個の丸みを帯びた平石が両辺に据えられていた。土坑内から遺物は出土しなかった。遺構の時期、性格ともに不明である。

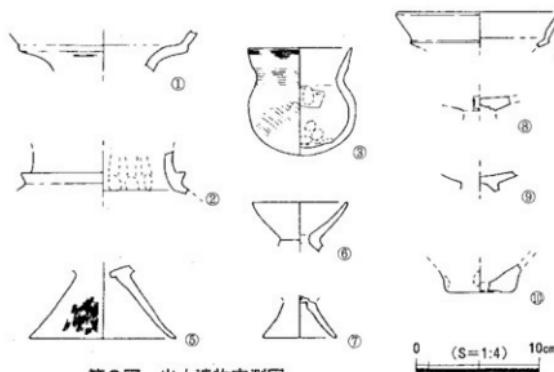
ピット 15基検出した。P 5から土師器細片が出土しているほかは出土遺物はなかった。ピット群の時期は明らかにしがたいが、淡褐色砂質土から掘り込まれており、大半は古墳築造後に作られた物であろう。

5. 出土遺物

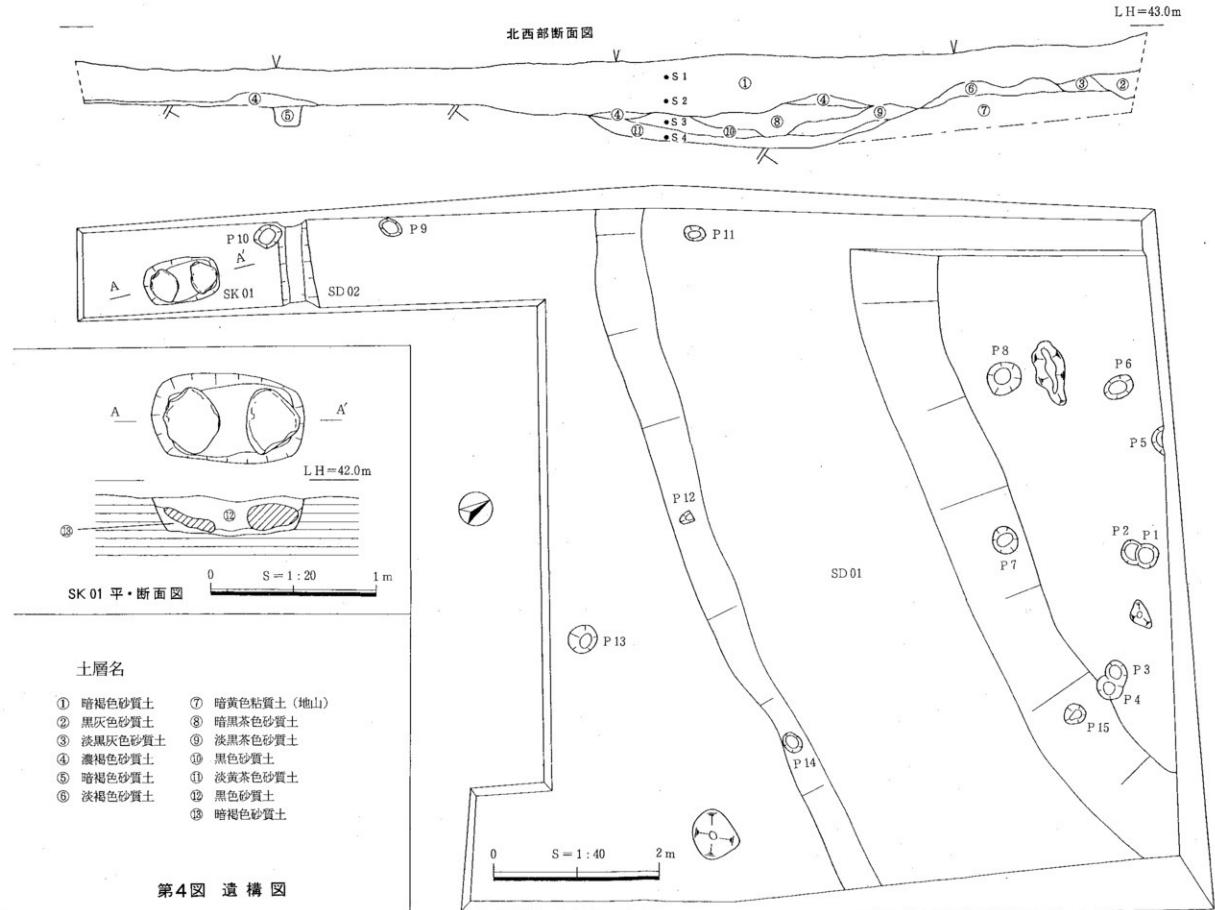
今回出土した遺物は、胎土がやや荒く、淡橙褐色を呈するものが多い。また表面もかなり風化しており、調整などの観察は困難であった。詳細は巻末の土器観察表に記した。

6. まとめ

諏訪5号墳は、検出した周溝から復原すると、直径20mの円墳であり、周溝を含めた直径が28mと推定される。古墳の時期は、周溝から出土した遺物より古墳時代前期、4世紀代と推定され、この時期の古墳の状況は、米子市内では日原、青木、石州府、日下で知られているが、主体部まで調査された事例が少なく不明な点が多い。またこのような状況は伯耆西部各地でも同様で、四隅突出型墳墓の消長とともにあわせて、前期古墳の様相を明らかにする必要があろう。諏訪古墳群は西山ノ後地区の4基の円墳と宮ノ後地区の方墳、土壤墓群からなり、集落とも同時期に併存していたとみられるため、集団の格差をよく表している。青木、福市遺跡とも至近の立地であり、日野川を臨む集落の在り方を示す一つの資料といえる。



第3図 出土遺物実測図



第4図 遺構図

米子市、諏訪西山ノ後遺跡における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. 試 料

試料は、古墳時代前期とされる円墳の周溝内から採取された、周溝上層の暗褐色砂質土（S1、S2）、周溝埋土上層の黒褐色土（S3）、周溝埋土下層の淡黄茶色砂質土（S4）の4点である。

2. 方 法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で疊などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入し、プレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てていう操作を3回繰り返して行った。検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亞属、節、および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものにはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 分析結果

水田跡（稻作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

3. 結 果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉12、草木花粉6、シダ植物胞子2形態の計20である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、マツ属複雑管束亞属（ニヨウマツ類）、スギ、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜科、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属—ムクノキ、モクセイ科、ツツジ科

〔草木花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亜科、タンボボ亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単状溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

分析の結果、S 2 と S 4 から少量の花粉が検出された。下部の S 4 ではヨモギ属とイネ科が多く、シダ植物胞子やマツ属複維管束亜属が伴われる。S 2 では、ヨモギ属などの草木花粉が少くなり、マツ属複維管束亜属が多くなる。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

古墳時代前期とされる円墳の埋没当時は、周辺はヨモギ属やイネ科などが生育する草原的な環境であったと推定される。その後、周溝上層の時期には、周辺でニヨウマツ類（アカマツないしクロマツ）などの二次林が増加したと推定される。なお、花粉が少ないと水湿地草木が出現しないことから、周溝は空掘状であったと考えられる。

参考文献

- 中村 純（1973）花粉分析、古今書院、P. 82-110。
 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、P. 248-262。
 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60 P.
 中村 純（1980）日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91 P.
 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13, P 187-193。
 中村 純（1977）稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、P 21-30。

表1 護訪西山ノ後遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	北断面			
			S1	S2	S3	S4
<i>ArboREAL pollen</i>		樹木花粉				
<i>Abies</i>		モミ属		2		1
<i>Pinus subgen. <i>Diploxylon</i></i>		マツ属複維管束亜属	1	100		5
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ				4
<i>Betula</i>		カバノキ属		1		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ		1		1
<i>Castanopsis</i>		シイ属		3		1
<i>Fagus</i>		ブナ属		2		
<i>Quercus subgen. <i>Lepidobalanus</i></i>		コナラ属-コナラ亜属		4		2
<i>Quercus subgen. <i>Cyclobalanopsis</i></i>		コナラ属-アガシ亜属		2		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		1		
<i>Oleaceae</i>		モクセイ科				7
<i>Ericaceae</i>		ツツジ科		1		
<i>Nonarboreal pollen</i>		草本花粉				
<i>Gramineae</i>		イネ科	1	15	1	47
<i>Cyperaceae</i>		カヤツリグサ科				5
<i>Halaragis-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属-フサモ属		6		
<i>Hydrocotylidae</i>		チドメグサ科				1
<i>Lacuicoideae</i>		タンボボ科				1
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属		5		59
<i>Fern spore</i>		シダ植物胞子				
<i>Monolate type spore</i>		単溝胞子	4	7		3
<i>Trilate type spore</i>		三溝胞子	1	3		24
<i>ArboREAL pollen</i>		樹木花粉	1	117	0	21
<i>Nonarboreal pollen</i>		草本花粉	1	26	1	113
Total pollen		花粉總数	2	143	1	134
Unknown pollen		未同定花粉	0	0	2	4
<i>Fern spore</i>		シダ植物胞子	5	10	0	27
<i>Helminth eggs</i>		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)



諏訪 5 号墳周溝 (南より)



土 器 3



SK 01 (東より)



土 器 5



諏訪 5 号墳周溝 (東より)

210.2
Yon
(32)

図書館

表2 出出土器観察表

(a : 口径、b : 器高、c : 底径、* : 復元径、△ : 残存高)

番号	器種	法量 c m	形態上の特徴	技法上の特徴	胎土	焼成	色 調	出土地点	備考
1	壺	b 3.5△	二重口縁壺		密	やや良	外面とも淡橙褐色	周溝	
2	壺	b 3.6△	壺肩部	突帯を張り付ける	密	やや良	外面とも淡橙褐色	周溝	
3	壺	a 8.6 b 8.8	小形丸底壺	外面刷毛調整 内面削り	密	やや良	外面とも淡赤褐色	周溝	
4	壺	a 13.6*	壺口縁部	突帯に刻み有り	密	やや良	外面とも淡橙褐色	P 5	
5	器台	b 6.0△ c 12.2	器台底部	外面刷毛調整 受部に穿孔有り	密	やや良	外面とも淡橙褐色	周溝	
6	器台	a 8.0* b 4.1△	小形器台	内外面とも風化	密	やや良	外面とも淡橙褐色	周溝	
7	高坏	b 6.2△	高坏脚部	環部より円盤充填の痕跡あり	密	やや良	外面とも淡橙褐色	周溝	
8	高坏	b 1.1△	高坏环接合部	穿孔有り	密	やや良	外面とも橙褐色	周溝	
9	高坏	b 3.0△	高坏环接合部	内外面とも風化	密	やや良	外面とも淡橙褐色	周溝	
10	底部	b 2.3△ c 6.0*	弥生土器底部		密	良	外面とも橙褐色	周溝	

報告書抄録

ふりがな	すわにしやまのうしろいせき							
書名	諏訪西山ノ後遺跡							
副書名	諏訪5号墳							
卷次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	32							
編著者名	佐伯純也							
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埼賀文化財調査室							
所在地	〒683-0822 烏取県米子市中町20 TEL(0859)22-7209							
発行年月日	西暦 1999年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 楽	東 經	調査期間	調査面積	調査原因	
すわにしやまのうしろ 諏訪西山ノ後 遺跡	らうとうけいんよなごし 鳥取県米子市 すわにしやまのうしろ 諏訪西山ノ後	31202	6 0 8 6	13.5度 23分 00秒	3.5度 23分 20秒	19990120 ~ 19990127	100m ²	無線基地 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項			
諏訪西山ノ後 遺跡	集落 古墳	古墳時代 奈良時代	周溝 土坑	土師器(壺、器台、高坏)	諏訪5号墳の周溝を 確認			